

氏名(本籍)	加 ^か 藤 ^{とう} 厚 ^{あつし} (静岡県)
学位の種類	教育学博士
学位記番号	博乙第581号
学位授与年月日	平成2年3月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	心理学研究科
学位論文題目	青年期における同一性の特質と発達
主査	筑波大学教授 教育学博士 加藤隆勝
副査	筑波大学教授 教育学博士 高野清純
副査	筑波大学教授 堀洋道
副査	筑波大学助教授 門脇厚司
副査	筑波大学教授 教育学博士 岡田明
副査	筑波大学教授 教育学博士 市村操一

論文の要旨

(1) 本論文の構成

本論文は、本文210頁、引用文献等9頁からなる。

(2) 本論文の研究の目的

本研究は、Erikson, E. H.によって提唱された同一性概念に関する理論的整理を行った上で、同一性測定のための同一性次元尺度ならびに同一性地位尺度を構成すること、またそれらを用いて青年期における同一性の発達に関する横断的ならびに縦断的な検討を行い、青年期の同一性の様相とその形成に関わる条件を明らかにすることを目的としている。

(3) 研究の方法と結果ならびに考察

まず第1章および第2章ではEriksonの心理社会的な人格発達理論の展望が行われ、①生涯をコア・クライシス(core crisis)の連続からなるグランドプランとしてとらえていること、②拮抗体験を通して基本的強さ(virtue)を獲得していく自我の機構を仮定していること、③個人のグランドプランが重要な他者のそれと噛み合って進行するという相互性(mutuality)を重視していること等の分析がなされ、同一性体験の要件として「自己の一貫性の感覚」および「社会集団との有効なかかわり合い」の2条件が基本的に重要であることが指摘された。続いてMarciaによって提唱された同一性地位概念の検討・整理とその特徴の指摘がなされ、Eriksonの同一性概念との関連が考察された。

また第3章では、①同一性の測定、②同一性形成に寄与する主要な領域、③同一性の発達過程、④同一性と社会的適応の各研究領域における主要な先行研究の展望と問題点の考察が行われた。

第4章では、以上の理論的検討をふまえた上で、同一性混乱から同一性統合に至る両極的同一性次元尺度の構成、ならびに同一性達成、権威受容、積極的モラトリウム、同一性拡散の各同一性地位とそれらの中間地位を定義する同一性地位尺度の構成が試みられた。同一性次元尺度についてはその単一因子構造が示されるとともに、高い信頼性係数が得られた。また、アパシー状態のクライエント（大学生）と一般学生の比較から、同一性次元ならびに同一性地位両尺度の基準連関妥当性を支持する結果が得られた。

第5章では、高校2年生160名、大学在学学生352名、および大学卒業生95名を対象とする横断的検討が行われ、以下の知見が得られた。

- ①同一性次元得点は、10代後半から20代前半にかけて男女ともにほぼ一貫して上昇する。この傾向は、男子では20代を通じて持続するが、女子では20代前半でプラトーに達する。
- ②同一性地位に関しては、高校2年生では約6割を占めるD-M（拡散－積極的モラトリウム）中間地位が大学4年生～卒業後1年目にかけて4割以下に減少し、他方A-F（達成－権威受容）中間地位を含む同一性達成地位の比率が全体の4～5割にまで増加する。20代後半にかけて、同一性達成地位およびA-F中間地位の比率は減少し、D-M中間地位の比率が再び増加する。
- ③本邦の大学生の同一性形成においては、“将来の仕事”、“生き方や価値”、“勉強”等の領域が重要であり、“政治”および“宗教”の重要性は平均的には高くはない。

第6章および第7章では、国立T大学の1年生（125名）および3年生（63名）をそれぞれ2年間ずつ追跡調査したデータを用いて、同一性次元ならびに同一性地位の発達に関する縦断的検討が行われ、以下の知見が得られた。

- ①同一性次元得点の水準は1年次にはほぼ一定だが、2年次の後期にかけて男女とも緩やかに上昇し、3年次から4年次前期にかけてやや顕著な上昇を示した後、卒業間際に若干低下する。また、4年次後期における得点は双峰的な分布を呈する。
- ②男子では“生き方や価値”、“異性の友人”、“同性の友人”、“勉強”に関する探索・危機（crisis）の水準、女子では“勉強”、“将来の仕事”、“同性の友人”、“趣味”に関する探索・危機の水準の変動と同一性次元得点の変化との間に、有位な負の対応が認められる。
- ③大学1年次には、D-M中間地位が6割近くを占める一方、積極的モラトリウム地位も2割弱と比較的多く認められる。2年次から4年次前期にかけて、同一性達成地位（A-F中間地位を含む）の占める比率は2割程度から4割程度にまで増加し、対照的にD-M中間地位の比率は6割近くから4割弱にまで減少する。
- ④発達の安定性はD-M中間地位が最も高く、A-F中間地位を含む同一性達成地位がそれに続く。他方、積極的モラトリウム地位と同一性拡散地位の安定性は最も低い。
- ⑤同一性達成地位への移行には、男子では“将来の仕事”に関する探索、危機の顕著な低下がともなうのに対し、女子ではこれといった特徴は認められない。
- ⑥同一性拡散地位への移行には、男子では“将来の仕事”および“めざすべき生き方や価値”の領域における探索・危機の高まりと“宗教的活動”への自己投入の高まりがともなうのに対し、女

子では“生き方や価値”に関する探索・危機と自己投入の両者の低下がともなう。

第8章では、大学1年生94名（男子45名、女子49名）のYG性格検査のデータ、および大学4年生28名（男子7名、女子21名）から得られたゲス・フー・テストの結果から、大学生における同一性の様相と社会的適応ならびに諸性格特性との関連が検討され、以下の知見が得られた。

- ①同一性次元高得点群は、YG性格検査において安定積極型のプロフィールを呈し、他方、低得点群は抑鬱性、劣等感、神経質、思考的内向等の特徴を含む平凡型のプロフィールを呈した。
- ②同一性達成地位と比較して、同一性拡散地位はより劣等感が強く社会的に内向的であることが示された。また、権威受容地位は同一性達成地位と比較して思考的外向、服従的、のんき、主観的等の特徴を示した。
- ③同一性次元得点とゲス・フー・テストの間には、「充実した積極的な生活」項目では有意な、また「豊かな友人関係」項目でも有意に近い関連が認められ、同一性次元得点と客観的な社会的適応の水準との関連が支持された。

第9章では、大学1年生94名（男子45名、女子49名）を対象として、同一性の様相と社会態度との関連が検討され、①同一性次元低得点群は無気力的・虚無的な社会態度の水準が高い、②各同一性地位群間には“伝統指向的”、“感覚的・娯楽指向的”、“無気力的・虚無的”の3社会態度について有意な差が認められる、等の結果が得られた。

第10章では、高校1～2年生を対象として、帰国高校生における同一性の特徴の検討が試みられ、43名の帰国生と94名の国内生との比較から以下の知見が示唆された。

- ①“2年以上”の比較的長期の一貫した海外在学経験は、校種を問わず同一性次元得点を高める効果を持っており、また2年以上の海外在学経験を持つ“長期海外在学学生群”では、積極的モラトリアム地位および同一性達成・A-F中間地位の割合がより高い。
- ②国内生では“男（女）らしい自分・生き方”、“社会問題に対する態度”等が同一性体験と有意に関連する領域であるのに対し、帰国生においては“異性の友人との関係”、“勉強”等が重要な領域となっている。

第11章では、本研究の意義と今後の課題の指摘が行われた。

審 査 の 要 旨

Eriksonの提唱した同一性の概念が注目を集めるにつれて、同一性の様相を実証的にとらえようとする試みも多くなっている。しかし、青年期の発達の推移を系統的に追及した研究は、内外を問わずほとんど発表されていない。本研究の意義は、Eriksonの同一性概念とそれを実証的な見地から発展させたMarciaの同一性地位概念に基づいて測定尺度を構成し、高校生から20代後半の成人に至る多数の青年を対象とした横断的研究によって、青年期の発達の推移を明らかにした点にある。また、大学生については、1年生及び3年生を対象に、2年以上にわたって半年ごとに反復測定を行う縦断的研究によって、同一性次元及び同一性地位の安定性やその変容・移行のパターン等を明らかに

した。これらは横断的研究では得がたい成果として高く評価される。

縦断的研究は多大の時間と労力を必要とするなど多くの困難を伴うものであるが、本研究ではそれぞれ2年余の追跡にとどまったのは惜しまれる。また、本研究では、同一性の発達を促進し、あるいは阻害する要因に関して日本の青年の特徴が明らかにされた点は注目に値する。しかし、調査対象に制約があり、結果を一般化するためには個別的な形成要因の分析を含め、さらに検討が必要である。

このように、いくつかの課題は残されているが、本研究は青年期の同一性の発達過程を系統的多面的に解明した優れた研究であり、同一性研究の進展に大きく寄与するものと評価される。

よって、著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。